創立三十周年に寄せて

大多優子

私が郷土研究会に入会したのは、図書館司書として仕事の助けになればと思ったためでした。

図書館が開館した昭和五十三年（一九七八）、当時は二階の一角に郷土資料コーナーがあって、文書資料や生活用品の展示がしてありました。小学生が夏休みなどの課題に郷土について調べ物をしに来館していましたが、資料が乏しく、あっても一般向けの資料のため読んでそのことの説明が必要でしたが、私自身、郷土資料についてはほとんど知識がなく、当時の田近館長頼りでした。

郷土研究会が創設された時、すぐ入会したのですが、実際の活動は他の会員さんまかせで、私は会の研修旅行に参加することだけを楽しみに退会もせず三十年来てしまいました。

研修旅行では普通はあまり行かない道内市町村の資料館や史跡、寺院など多く見て回り、知らず知らずのうちに知識が広がったように思います。

三十年を振り返ってみると、地味な活動を一からこつこつ進めてきたは亡き先輩会員たちの顔が思い出され頭が下がります。

私は昨年退職しましたので、新たな気持ちで会の活動に参加していきたいと思います。

斉藤三男

自然に恵まれたこの町に生を受け、両親の他界年齢を越え今日あることに感謝しています。

朝、六時三十分からのテレビ体操によってまず体調を整え、まず新聞を広げる。大きな見出しと地方版から目を通す中に知人等の訃報の記事がなければ、先ずはホッとします。

私は農協を定年退職して今年で三十年になりますが、郷土研究会の入会は退職後二十年経った平成十二年（二〇〇〇）一月でした。当時の会長野呂さんの推薦により入会させてもらいました。その時に会の活動内容について野呂さんから詳しく説明があり、先人の心を受け継ぎ郷土の歴史を掘り起こし計画的に活動しているということでしたが、私も昔の町のことなどに多少の興味もあって入会することとしました。

私の会における活動はまだ十年くらいのものですが、いずれにしても諸先輩の残された貴重で偉大な足跡を大事に後世へ引き継いでいくことが会員としての責務であり、三十年を迎えた新得町郷土研究会がこれを契機に今後もさらに新たな史料などの発掘に務めいくことに私も微力ながら協力は惜しまないつもりです。郷土の歴史などを研究するという志を同じくする我々は会の三十周年を契機にこれからも内容の濃い活動を続けていきたいものです。

片桐直

昭和五十六年（一九八一）十一月、新得町郷土研究会として発足し、ここに三十年の節目を迎えるに至りました。この歴史を寿ぐかのように今年十勝文化団体協議会より栄えある文化賞を受賞したことは。誠に喜ばしく慶賀にたえないものがあります。また、これより先の平成二年度には新得町文化連盟より文化貢献賞を受賞しており、これらの受賞が以降の会の活動に励みになっているものと考えます。

本町が開拓されて一一三年。先人は血と汗の中で頑張ってこられ、今在る姿になっており、我々は平和で文化的な暮らしの中で過ごすことができているわけです。

これまでの経過を思う時、誠に貴重な物事があるわけで、これらを掘り起こして未来に向けて風化させないことが大事だと思っています。

これまで会で発刊してきた「ふるさとの伝承」はじめ各郷土史と四十三ヶ所の由来板、石柱建立の保存は、今後もも取り組んでいかなければならない事業であると思う次第です。

菊地幸一

平成三年（一九九一）四月に東京から新得に転居し、その後、縁あって平成六年（一九九四）四月からは司書として町図書館に勤務し、現在に至ってます。

学生時代から歴史が好きで、国史学を専攻していたこともあり、新得の歴史には興味がありました。たまたま職場の上司であった大多優子さんが入会していたことと、新得の歴史を学ぶには、郷土研究会に入会するのが一番と思い、平成七年（一九九五）に入会しました。早いもので、あれから十七年が経ち、今まで諸先輩の皆さんには、いろいろなことを教えていただきました。札幌で生まれ育った私にとっては、現在の風景や様子しか分からないので、聞くこと見ること全てが勉強でした。都会とは違い、歴史そのものが身近に存在していることが魅力です。

特に思い出深いのは、平成二十年（二〇〇八）に安倍会長、髙橋昭吾さんとともに石切山の採石場を探索し、発見したときのことです。身の丈ほどもある笹を掻き分けて、本当にこの先に採石場があるのだろうかと思った矢先、忽然と現れた採石場は、目を閉じると当時の様子が感じられるほど、荘厳なものでした。

まだまだ諸先輩の皆さんから学ぶことが多いですが、今後は先人の歴史の調査、検証はもちろん、それを後世に伝える活動にも、しっかり取り組んでいきたいと思います。